夏

五月雨や鵜さへ見えなき淀桂（新花摘）
五月雨や黄昏の社燈消ゆる時（新花摘）
五月雨の堀たのもしき此ころ（新花摘）
五月雨や美豆の寐覚の小家かち
五月雨や名もなき川のおそろしき

夏

五月雨下

九山主水が画たる帰雁の図

湖へ富士をもとすや五月雨
小田原で会羽賀たり五月雨（蕪村句集）（新花つと）
紙燭—て廊下過ぐるや五月雨（新五子）
床低き旅のやどりや五月雨（新花つと）
近道や水ふみわたる五月雨（新花つと）
濁り江や鵜の玉の緒や五月雨（新花つと）
かくれあ[redacted]はぶし詰りや五月雨（新花つと）
昆布でふく軒の雫や五月雨（新花つみ草）
廂迄棚に何の花そも五月雨（新花つと）
あか汲で小舟あひけむ五月雨（新花つと）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

淫雨小沈むながりよ　五月雨（新花つみ）

夏

天文

（陰五月雨）

石像のはとり過ぐる夏の月

賊舟をよせぬ御船や　夏の月

河童の云ふ事聞ゆる宿や　暮の月

めけうみの浅瀬浅瀬ゆく夏の月

堂守の小草なりあつ夏の月

遠浅や　兵船　夏の月（新五子）

夜水とる田人の聲や夏の月（蕪村句集）

殿守のそこらを行や　夏の月

夕立や門脇殿の人だおり（蕪村句集）

夕立や草葉をつつむもら雨

双林猶冷香多立や筆の乾のま　一千言

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

蕪村　宗阿居士世話　花の雲八重にかさねて雨となる　三重新五子

旅意廿日路の指中より

楊州の津も見えそめて雲の峰　四澤の水の涸れてより

雲の峰　飛のりの戻り飛脚や雲の峰　新五子

蘂園み雨ふる五月五日小　新花摘

薫風やともしたてかねつ巌嶋

高紐にくるる幣や風薫る　新五子

曠野行く身に近ほくや雲の峯

雲の峯に肘する酒天童子

夏　地理

静かさや清水ふみわたる武者草鞋

水晶の山路分け行く清水哉　新五子

天ぐて結べば濁る清水哉

石工の鑿冷ー

我宿にいうふりくぐり清水哉

落あふて音なくなれし清水哉　蕪村句集　新五子

苔を得て清水に遠き恨哉

銭亀や青砥も知らぬ山清水

石工の飛火流るる清水哉

夏川をこすられさよ手に草履

丸山主水が小さき亀を守りたるに賛せよとのぞみれば仕官の命の地に栄利を求めんよりは志の尾を泥中に曳くに如かじ

蕪村

夏山や通いなれたる若狭人
夏山や京尽に飛ぶ鷺一つ（新花摘）
夏山や神の名いざ名ごにきて（新花摘）
夏山やうちかさふいてろくろ引の
夏野行
なくや雲雀に村の雨天
雷の音に村雨天
暗野行
なくや雲雀に村の雨天
雷の音に村雨天
夏山や地震に地震夏野哉
行き〳〵てここに行き行く夏野哉
討ちはたす梵論つれたちて夏野哉（新花摘）
鮒鮓の便も遠き夏野哉（新五子）
実方の長櫃通る夏野哉（新五子）

夏

時鳥

大徳寺にて

時鳥棺をつかむをとるより
時鳥なくや（自筆）お寺の夜たるあ（蕪村句集）
時鳥平安城をすぢかいよ

探題実盛

時鳥書よみなれし東四郎次郎
鞘なしの刀もやはらかに時鳥
鎧着る我が古巣なふ花も がな
名のれ〳〵雨のしのゝめの時鳥
まるてなうねるわやはらかに
岩人妻の狂女恋せよ時鳥
歌なくてやまぬ時鳥

蔵書印

蔵書印

蔵書印

閑古鳥招けとも来ず　山人の人なき閑を鳥なりけり（井無村）
柊さすは門ごゝろと侍るの注文や閑古鳥（新花摘）
夕風や水青鷺の脛をうつ
閑居ふ気いさゝか白き鳥飛ぬ（新花摘）
閑のたに水雞のそらなきなり
提灯を消せと御意ある水雞小（新五子）
一つの命をのがれたる魚哉

蛸蜘や向ひの女こちをみる
蜘蛛のかゝれば侍る（新花摘）

夏

魚

蟬

蝸牛

蟬なくやきのふ三日の月（新五子）

馬南剝髪三本木にて

つくら葉に取付て蟬のぬけ殻（新花摘）

寓居

蕪村

初松魚觀世太夫が端居かな（新花摘）
朝比奈が曽我をとゝ日や初鰹（新花摘）

鮎くれてまだ過ぎ行く夜半の門

鳥まれに水また赤し蟬の声（新五子）

蟬なくや行者の過ぐる午の刻

蟬なくや僧正坊の湯あみ時

脱ぎかふる柿も蟬の小川かな

大佛のあなた宮様蟬の聲

半日の閑を樓門や蟬の聲（新花摘）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

夏

虫

（蝉、蝸牛）

一書生の用窓に書す

蝉鳴や行人絶る橋柱（新五子）

蝸牛の住みたてし宿やつま世界

蝸牛や其角文字なのにじり書

こもりゐて雨うかがふや蝸牛（蕪村句集）

點滴のうたれてこもる蝸牛（　）

寢の三態まで〳〵や蝸牛（新花つみ）

関越ゆるいばりの車や蝸牛（新花つみ）

蝸牛何思ふ角の長短（神宮紙）（新五子）

雨にとまる玉水の宿の蝸牛（新五子）

蓑虫かちゝともなくを蝸牛（イ）

さし汐に雨の細江の蚊屋の内に螢放ーてアヽ樂や（イ）

狩衣の袖の裏はす螢かな

一書生の用窓に書す　螢火向は尻からぬける禁かな

掴みとりて心の闇の螢かな（新五子）

古井戸や蚊に飛ぶ魚の音暗し

上凡に蚊の流れ行く野川かな

蚊の聲す（新五子）忍冬の花散るたびよ（無一句五子）

屋を蚊のこがれてとまる徳利かな（イ）

蜑いとふ身はを古郷に晝寢かな（蕪村句集）

雪信が蜑うち掃ふ硯かな

蕪村

羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より

宴楽序 月の句を吐いてへらん蚊の朦

夏

花木

卯の花や庵へ寐に来る小商人（新五子）

卯の花の二ほ三ほ路の廣葉哉

卯の花や貴船の神女の練の袖（新花摘）

金の扇に卯の花画たる句せよと望まれて

白かぬの花咲く井出の垣根哉（新花摘）

卯の花もさくや井出の里（新花摘）

橘や昔の人の弓矢取（新花摘）

橘のかほりたる時や古館

虎雄が世を早うせし悔

蕪村

夏の雨の日やとたきみられてねむの花（新五子）

蝉の鼻お合歓の葉陰哉

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

夏

述懐

口な――の花咲く方や日にうとき（新花摘）

米屋一周忌

ゆの――さよ櫛花咲く雨の中（新花摘）

木立

柚の花やゆかしき世屋の乳隠（新花摘）

柚の花や能酒藏す屋の内（新花摘）

虫

虫のために害はれ落つ柿の花（新花摘）

渋柿

渋柿の花散る里となりぬけり（新花摘）

柿の花きのふの散りし黄ばみ見ゆ（新花摘）

椎の花人もすさめぬ匂ひかな（蘇生）

夏

若葉

山にそふて小舟漕ぎ行く若葉かな

不尽一ツ埋み残して若葉哉

絶頂の城たのもしき若葉かな

蛇を截てわたる谷路の若葉哉

窓の灯の梢にのぼる若葉哉

高どのゝ灯影に沈む若葉かな（新五子）

金の間の人もの言ぬ若葉かな（新五子）

浅間山煙の中の若葉哉（新選）

をちこちに瀧の音聞く若葉哉（新花摘）

谷路行く人小さき若葉哉（新花摘）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20

ガラス使用

夏

述懐

淺河の西し東す若葉哉（新花摘）
山畑に小雨晴れ行く若葉哉（新花摘）
般若讀む庄司が宿の若葉哉（新花摘）
夜さりの帆にありあけて若葉哉（新花摘）
蚊帳を出て奈良を立行若葉哉（蕪村句集）
若葉して水白く麥黄ばめり（新五子）
茂山やさそひ木の目をさゝやきたる若葉哉
やとり木の目をさゝやきたる若葉哉
岩根行く帆おそらしき若葉哉
峯の茶屋に牡丹飾す若葉哉
出家して親王ます里の若葉哉

夏木

陰花木
陰若葉

菖蒲あやまつ宮や若楓
三井寺や四日の午にせおふ若楓（蕪村句集）
若楓矢數の箭もみちせらく（新花摘）
若楓學匠書に眼をさらす（新花摘）
若楓貧しき賤の掃さゝし（新五子）
葉櫻や草鹿作る兵等（新花摘）
葉櫻や奈良に二日の泊り客（新花摘）
いつこより礫打ちけん夏木立
酒十駄ゆりもて行くや夏木立
花が実が水にちり込む夏木立（新五子）
蚊帳を出て奈良を立行若葉哉（蕪村句集）
夏木立（新五子）

魚どさき村に出でゐる夏木立（新五百題）
賣卜先生木の下闇の訪れ良（新花摘）
来て見れバ夕の櫻実となりぬ
円位上人の所願にも負きたる身のいとかなしき様）
實櫻や死殘りたる庵の主
かしこくも茶店生ゐる夏木立
青梅に眉あつめたる美人哉（蕪村句集　立車及古）
動く葉もなくてそろしき夏木立の
青梅をくゞばかつ散る青葉哉
とろゝ汲む音なしの滝や夏木立の
青梅や微雨の中行く飯炊（新花摘）
青梅やさゝやかに住む法師が寺とはん
わくらばの人垣を脇に（新五子）
青梅や棒心の人垣を脇に（新虚栗）
青梅にうち鳴す歯や鼠のこと

夏
大草
茨

筍や柑子をもらふ垣の外
筍や甥の法師が寺とはん
筍の藪の案内や立ち話
筍や五助畠の麦の中（新花つみ）
筍や垣のあなたは不動堂（新花つゝ）
堀りくらふ我筍の細き事（新花つゝ）
筍を五本くれたる翁かな（新花つゝ）
若竹や是非もなき芦の中（新花つゝ）
若竹や十日の雨の夜明かな（新花つゝ）
若竹や村百軒の麦の音（　）
若竹や夕日の嵯峨と成りぬ

若竹や　山こん　橋本の遊女ありやなし

浅東芭蕉庵
元禄の
夏
魚市たの〳〵たる人の七回忌追福のために
手向となす則興佛壇の回向なり

耳目脈脈　こうに玉巻く芭蕉庵

いの東皐子れば

楠より放つ後光や若竹や　横雲のあちこちに見ゆ（新五子）

若竹や　暁の雨　宵の雨（新五子）

山吹の卯の花の後や　花菖蒲

路絶えて香に世まぎる　咲く菖蒲

花菖故郷の道に似たるかな

愁ひて岡に上れば　花菖

夏

牡丹

虹を吐いて開かんとする牡丹かな

牡丹散てうち重なりぬ二三片

牡丹切て気の衰へや

地車のとゞろとひゞく牡丹かな

寂として客のたえ間の牡丹かな

散りて後傳ふ牡丹の絶間の牡丹かな

山蟻のありともさとる牡丹かな（蕪村句集）

廣庭の牡丹や天の一方　月（新花つみ）

閻王の口や牡丹を吐かんとす

二と草も刈りすてゝあり寺の牡丹

日光の土にも彫れる牡丹かな（神享紀）（新五子）

汝翻舌本吐紅蓮

蕪村

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

不動遠く琢磨か庭の 牡丹ル（新花摘）

蟻垤　蟻王宮朱門を開く 牡丹ル（新花摘）

や一二十日月も更け行く 牡丹ル（新花摘）

方百里雨雲よせぬ 牡丹ル（新花摘）

咏物の詩を口すさむ 牡丹ル（新花摘）

山蟻の霞道つくる 牡丹ル（新花摘）

牡丹ある寺行き過ぎしうらみル（新花摘）

金屏のかくやくとして 牡丹ル（新花摘）

南薫を牡丹の客や福西寺（新花摘）

おうーんやーろかなの猫こうねの蝶（新花摘）

みーか夜の夜の間にさけ。牡丹かな ㊀

蓮池の田風に考ふも佛の ㊀ のふるさまたへや蓮の花 ㊁

葉裏より蓮の香や水をこんなとそ芦二寸（蘇東坡）

夏

水草花類

白蓮を前らんとそ思ふ僧のさま

吹売の浮葉にけみる蓮見ル

律院をのそきて

飛石も三つ四つ蓮の浮葉ル（蘇東坡）

庵主のみこのあなかまとて立入たよふいと尊とて

顏湖

羅に庶ふ蓮の匂ひル

藻の花や兰勝太か鐘の水はなれ ㊁

藻の花やかたわれからの月もまた

道の へや刈藻花さく宵の雨（蘇東坡）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　　ガラス使用

藻の花や小舟よせたる門の前（新花摘）

（浪花の舊國主にて諸國の俳士と集めこゝに会延ある時）

萍を吹きあつめてや花造

河骨の一もと咲くや雨の中

澤瀉や水のうらかく矢尻形（新五子）

燕子花へたりと弐鳥のたれてける

宵々の雨に音なし燕子花

貧乏なれ下屋敷や燕子花（新五子）

夏草（除牡丹芍薬大葦水草花野禾也）

學窓芍藥に紙魚打ちふ窓の前（新花摘）

けしの花まかきすへこもあるかりそめに早百合活たり谷の坊

旋花（ヒルカホ）や道唐の三十里

書顔や町にかへり行杖の數（新五子）

一人や去やかの父に似て去やかの花（新花摘）

今ぞたゞ獨活もとりもあへず若葉哉（新五子）

草いきれ人死居ると札の立

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

ぬき取る小舟に歌ハなかりけり（新花摘）
採薬をうたふ亮根の僧夫子
（水漬く）（新稲青々と）夏草
一つ〳〵めや雲見えなくに麥の雨
砂川やあるじハ麥を流しこす
郷君の暁起や　麥の雨（新五子）
水深く利鎌ならす真菰刈

夏麥

馬南剛髪三本木にて麥刈て遠山見せず窓の前
病人の駕も過ぎけり麥の秋
辻堂に死せる人より麥の秋（新花摘）
飯盗む狐追ふ声や麥の秋（新五子）
麥の秋淋しき貧の狂女かな（新花摘）
麥秋や狐のうめる小百姓（新花摘）
麥秋や遊行の棺通りけり（新花摘）
麥秋や何に驚く屋根の雞（新五子）
麥秋や鵜帰くなる長がもと（新花摘）
狐火や立助新田の麥の雨
旅芝居穂麥がもとの鏡たて
狐火やいづこ河内の麥畑

蕪村

長旅や賀なき村の麥ほこり

麥川や一夜一夜に白き花待つ小家哉（新花摘）

洛東芭蕉庵にて目前のけしき

蕎麥あまき京を隠して穂麥哉

嵯峨の雅因か閑を訪ひて

うき風に音なき麥を枕もと

大魚骨九董なきあとをとぶらひて返る途中

おもひ布引瀧見に

春の水

麥川や穂麥か中の水車

兎足三周の正当ハ文月中の四日なるを卯月のすゑつかたに申遣すとてちぎりおきけるに

麥川ぬ近道来ませ法の杖

麥川に利き鎌もてる翁かな

夏野禾（除麥）

雷に小家ハ焼かれて瓜の花

瓜小家の月を留おく隠居哉（蕪村句集）

仇花ハ雨に揺れて瓜畑（蕪村句集）

みちのくの吾友に草廬を叩かれて

葉隠れの枕探せよ瓜畑

畫贊

詞多く早仏くさし

晴飯法師にて旧識の如く語り合ひて後

水桶にうなつきあふや瓜茄子

兵ともに大将瓜をわかたれし

夕顔の花噛む猫や雛所心

蕪村

夕顔や竹焼く寺の薄曇(ノ)

夏

夕顔や行燈提げて君か誰そ（新五子）

夕顔や武士も出て腰の裏つきの

夕負や畷田に引く早苗ノ（新花つ）

水古き深に苗の緑かな（新花つ）

獺の住む水ノ田に引く早苗ノ（新花つ）

山おろし笛を掩ていろかなの

一つあや露を近江の麻畠

近江路や麻刈雨の晴間ノ（新五子）

麻を刈れと夕日此頃斜なる（新花摘）

硝子の魚ふるまゝの秋(ノ)

秋

初秋

夜寒

身ノ

病旅

女郎花ともおぬけさの秋(ノ)

貧之に退(ノ)付ふれうけさの秋(ノ)

厨こに鬼を笞てるるや秋なる（新五子）

秋立や何になるうけさの秋（新五子）

秋来ぬと合点かする（新五子）

初秋やよるの灯ともす宵の程・

温泉の底にわの足見ゆるけさの秋（新五子）

猪飼の後ことしなくなれり・

蕪村

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

文つる師の鼻赤き夜寒かな
右蕪華を見なんと高慢節の話

欠くて月もなくなる夜寒かな（蕪村）
おもて居てもうねとりもあてどなく
夜を寒み小窓（老者）にともし火かきたてなどす小机・
盗人の屋根より消ゆ行く夜寒かな（新選）
多にもや横川の衣をまくれば・
多にもや三妻の梯を閉ぢ寒かな
巫女に狐恋する夜寒かな
書きつる師の鼻赤き夜寒かな
貧僧の佛をきざむ夜寒かな
なきたれて猫恋をする夜寒かな

秋

夜長
秋暮
晩秋

蕪村

猿丸太夫讃

老懐
生事（こちら窓に暗き一燈）
門を出れば我も行人秋のくれ
ふうそくをおもふ秋のくれ
佛一多に杜もれ秋のくれ
父母のつきそふ秋のくれ

業平塔の油ぬるき夜長かな
山ぶるの杜ふもとか長き夜
長き夜通夜の連歌の（蕪村句集）
長き夜やもの書き官者が北枕（新五子）
ともしに飽ぬ（蕪村句集）
あちら向に（こちら向に）なるもうとし秋のくれ（句集）
生事より又佛一（一驚蕉）秋のくれ
門を出れば我も行人秋のくれ
ふうそくをおもふ秋のくれ
佛一多に杜もれ秋のくれ
父母のつきそふ秋のくれ

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

秋のくれ辻の地蔵と油まき　（蕪村）

秋のくれ仏に化る狸哉（秋元）

いさかなき退日もくれぬ暮の秋（蕪村句集）

ある方にて

一人来て一人を訪ふや秋のくれ

浴東芭蕉庵にて

冬ごもりまたよの人に宿をかす

灯ともせといひつゝ出るや秋のくれ（新花摘）

寂として音なき夜の雨の秋（蕪村句集）

寂かさや岩にしみ入蟬の声（猿蓑）

訓読の経をよむやくれの秋（蕪村句集）

人に何に化るかもしらし秋のくれ（蕪村句集）

秋

時令

（初秋、秋暮、晩秋、夜寒、夜長、身に入）

思古人移竹去来

別故人木芙蓉

野辺の秋急ぐともなき人や来る（蕪村句集）

多の秋かこいをそふるあすもがな

小冊や燈の秋かやゆうべ

秋の灯やゆかしき書を read

秋ひとり（蕪村句集）

あの子の顔まあかに泣て秋の暮

甲賀二疋の一つ哉

る窓のちゝとなくなく秋の暮

九山氏の墓まゐりを思ひたゝせ給ふと聞て

近江の甲賀忌

伊賀の甲賀

蕪村

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

退刷を弟子に刺す秋の旅（蕪村）

頭巾寺にて笛のうたひものがたりある頃ぞ秋

宇治行

帯を引裂く琵琶の流や秋の声（蕪村文集）

三井の山上より三上山をのぞんで

秋たてど（十三新選）あたらの秋の初を知る哉

秋たてど――あたらの晴のくもり也

探題雨燈

秋の夜や古き書よむあるじ哉

住むかたの秋の夜遠く灯影小し

うちよりて後住ほかる寺の秋

宮津智の字秋興

秋

砧

蕪村

小道行けい近く聞ゆる砧 外

うき我に砧うてよと今ハ又止ミ子

うき人に手を打たれたる砧 外

石を打狐守夜の砧 外

遠近をちこちと打もろ〳〵砧 外（新五子）

旅人る我家しらんもとの砧 外（新五子）

麝深き庄司が妻や小家がち（新五子）

異夫の衣桁をつる、砧 外（新五子）

秋惜む戸ぬたを打や砧 外（新五子）

迷いるを呼い打や砧 外（新五子）

貴人の閨に立聞く 砧 哉
露深き廣野や千々の砧の
此二日砧きこえぬ 隣 哉
なつかしき人のふた里の砧哉
枕ゆと砧よせたるなれ哉

秋

菜山子

姓名は何ぞかしらず 哉
水落て細腰高き 哉
三輪の田よ頭巾着てみる哉
我宿よからぬ雲来ぬる哉

雲程度旅立として我に同行を
まめやかにたのもしきかな
秋風の動かして行くや 哉
哉者給賛 法所柿ふたつ哉
未醒との田よ依然たるかな 哉（新立子）
人に似よと老のつくれるかな 哉（新立子）
畠主のかく見舞て 哉（新立子）
畠主かく逢て戻りけり（新立子）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

錦する秋の野末のこゝ―弥（新五子）
錦する野よこと〳〵とかく―弥
稲刈て化をあらそふ―弥
花鳥の秘色のこすゝう―弥
ケシチキ
か逃たゆーちぬかゝ―弥
朽尽す秋よ行むかゝ―弥
筮られて面目なきかゝ―弥

模待へおらて迎行狂女汁 魂祭 王孫いまた帰り来す
模待や善提林寺の 徹書記のゆかりの宿や魂祭
庁屋 あちきなや牧尾の猿も魂祭
模待にまもる売僧や月も出ず 牛祭

秋事

（詰ナシ）

太秦祭 角文字のいさ月も出ず 編外
看病の耳に更行 編外
萍のさそひ合せて踊りけり
ゆくと犬の吠る町 踊て踊りけり（蕪村句集）
細腰の法師すらたゞ踊り 踊り（新題林 新五子）

美一幅の画に賛をもとめて
四五人に月落うせぬ 編外
ゆかしくも踊も村の 錦木の門をめぐりて踊けり
あれ〳〵の 八朔や叔母ます〳〵老て 編外
蕪村

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

藥なり今日小袖等を
徳本の穴も過たる薬ほり（秋）　　駒ぬしてや額白（蕪村）
狩衣の袖より枝る南瓜（秋）　　組みあふて物打かたき地とり（新五子）
を付る角力を見る　鋪師の　　角力ありくや（蕪村）
春夜にねを　　角力ありくや（蕪村）
角力取つけの小柄を　　夏ますき角力を春初場所（蕪村）
祝儀角力の中にすもゝの名の　　汗うる富よ物くさや角力取（蕪村）
よき角力いで来ぬ老の　　古さとの坐ぶとんあいぬ角力取（新迷）
恨外（秋）　　毛見元の舟さし下せ二ツ上川（秋）
汐よりしすゞしうれしきたなの外の　　つと入や納戸の暖簾ゆるくさよ（秋）
二つ三つよき名をもらふ　　お撰ぶの　　つと入や納戸の暖簾ゆるくさよ（秋）
二三軒つと入行く　　旅の人（秋）

旅人よ夜窓の月に　　異夫の衣摺らん小家かな（新五子）
庵の外（新五子）　　秋風や（新五子）
庵の月　　地理　　食物　　案内
虚深き庭訓の　　砧小遠山（新五子）
砧小遠山（新五子）　　砧小遠山（新五子）
秋風に　　うき人のなるを打やむ砧小（新五子）
石を打　　物思ふ秋の砧小
虚をもたらす　　砧小
迷ふ子を呼ぶ　　打やむ砧小（新五子）
貴人の門に立さく砧小　　初汐や遅く上る小魚小
露深き屋敷に　　初汐や遅く上る小魚小
千うの砧小　　立去年一里屑毛に秋の筆書・
蕪村　　升飲の僕ふとらぬ新酒小（秋）

秋

器用

（案山子隊）

恙なき稲の葉を朗詠集撰抜の糸も白きより・

言ふ灯の乾鮭なんとするあれど

穂刈りて化をあらはす稲多村に泊まりたるかかし哉

花鳥の彩色のこすかかし哉

秋の野末の小屋に寝ころびて

なき屋のお化かな

秋夜閑室のもとにおを座して世たるきみを歌ふ

さらかれ川の辺りかな

燕村

笠とれて面目なきかかし哉

田よ淀て田を植川や　秋の水

星辰のなき田わたりや　夜の水

蕪水柳よまゆなくなりぬ　曲水

（蕪村）

（新五子）

（袖草紙）

（蕪村句集）

（新五子）

（新五子）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

名月や露もぬれぬ
（露をかこつ）
秋
名月

蕪村

盗人の首領found
番屋ある村も更たり
名月や兎の
（涙せき）
名月や雨をた
名月に
名月や夜ハ人住まぬ峰の茶屋（涙せき）
雨のいのりの昔を思ひて
名月や神泉苑の魚躍る
月こよひあるじの翁舞ひ出でよ
仲麿が魂祭りせん今日の月
花守ハ野守に劣る今日の月
かつまたの池ハ蛸なり今日の月（涙せき）

（下ナ）

（蕪村）

物集て花火をきく（かく）
花火せよ淀の御茶屋の夕月夜
花火見えて漸く家百戸の
玉棚をそよがせもせぬ
おありや憐の
ちりつもの雪
山陰や維
あなうらし水
秋のなを
行く秋のところ〳〵や下り簗（新五子）
しか〳〵と主訪来す下り松木（新五子）

（蕪村）

（くし縄（新五子）
くつれ落る）

（新題林）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

身の晴
腐の頭巾も通る月見哉（題葉叢）
忠則古墳一樹の柊る倚杖
月三よい松よかへたらやどり水
良夜訪客なくなれいづ月を友
中々に一人あれば
松鳴の月見ぬ人やうつせ貝
名月や今朝見た人み行達（新五子）
名月に負一き道を通りけり（新五子）
名月や秋月とのこ臓（新五子）
櫻なきまるこーかけそはめ月（新五子）
梨の木に寄そわいま月見哉（新五子）
月見ぬき女を落す浅瀬哉（新五子）

秋月（除名月）

戸無瀬の滝

水の月やを望みある雪かとそ
十三夜の月を賞することを
我日のもとの風流をうけり
唐人よこの花過きそ
山茶花の木の間見せそ名の月
とする気でひとり来よや十三夜
水洒して池のひつや後の月
十月のこよいも時雨後の月
水一節月よりうつす桂川
葺の月あるじ
月天心負一き岡一だ芋堀りな
旅人よ笠鳴かる町を通りけり
雨の月

蕪村

探題雨月

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

山の左や海を離るゝ月も今
鯉長が酔ふや岩魚と玉のまた崩
れんとすれども（其侭眠中よ在つて）
月見れバ涙ぞ砕く千とせの玉
鯛煮る宿ゝとまりつゝ石の月（新五子）
月の富秋清か雁音の高き外の
十六夜や鯨寄初（マヽ）鮃野浦の
待宵や女主人な
五六升芋煮る坊の月夜哉（新五子）
後の月賢き人を訪ふ夜外の
後の月鴨立つあとの水の中の
三井寺に縁あの夜着や後の月の
三井寺や月の詩つゝ踏之助（詩よ）

秋天之部

露

白露や芥の刺に一つづゝ
白露やさつ男の胸毛ぬるゝ程
かゝらの露に童たき勒（ママ）
ものゝふの露はらひ行猪外
市人のものうち語る露の中
夕露や伏見の相撲ちりぐに
朝露や（露一顆珠）まだ霜しらぬ髪の落
殿原のいづち急ぐぞ草の露（新五子）
白露の筑紫へ出る檣原外（新五子）
白露や家ごぼたる筐の上の

狐の法師の化たる画に

鍋釜もゆかし一き宿や今朝の露 ㋑
舎利となる身の朝起や草の露 ㋑
篠かけや露よ聲あるかけそつし ㋑
旅人の火をうちこぼす秋の雷 ㋑
白雲の身や葛の葉の裏表（蕪村文集）

十六夜の雲吹きぬ

秋

秋風
野分

秋風や唐黍のおとろき歩し 秋の風 ㋑
秋の風書を読む窓に詩うたふ漁者樵者・
秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者・
秋風や干重が上たる屠家 ㋑
金屏の四隅いかめしき秋の風
思ひ出て酢うる俤よ秋の風（新題林） ㋑
かなしき寿の糸吹く秋の風・
浪路より鈎の糸吹く秋の風・
秋の風（天和名所図絵）
門前の老婆子薪負ふ野分・
棒突て庄屋と見ゆる野分哉（新題林）
禁なる我菩麦有す野分哉

鳥羽殿へ出六騎りて（無村）
市人のよけ〳〵野分かな
客僧の二階万り来る野分哉
笠ふたつ風ぬくしの
みだれ小の恙なき帆柱寐せる野分哉（新五子）
関の灯をともせいきほひ
底のなき桶こけ歩行野分哉（新五子）
西須广を通るやうの
あしたかな（イ）
鴨の巣の細代よりる野分哉（新五子）
船頭の棹とられたる野分哉（新五子）
野分して風のわたるにちさすみの
暁の屋根に矢の立つ野分哉（新五子）

菊作りみな寝しづまる夜寒哉（イ）
合利となる身の
名記やものの秋（ロ）

秋
天文
（月陰 風陰）

降かけや雪も吉ある
かけ文つし（ロ）
霧なれて高砂の町
まのあたり（イ）
朝霧や鐘にかくる
夢の人通り（ロ）
蕪村

白露や家とはちがふ
ものの色（イ）
ものの色（ロ）
ものの色（ハ）
ものの色（ニ）
ものの色（ホ）
ものの色（ヘ）
ものの色（ト）
ものの色（チ）
ものの色（リ）
ものの色（ヌ）
ものの色（ル）
ものの色（ヲ）
ものの色（ワ）
ものの色（カ）
ものの色（ヨ）
ものの色（タ）
ものの色（レ）
ものの色（ソ）
ものの色（ツ）
ものの色（ネ）
ものの色（ナ）
ものの色（ラ）
ものの色（ム）
ものの色（ウ）
ものの色（ヰ）
ものの色（ノ）
ものの色（オ）
ものの色（ク）
ものの色（ヤ）
ものの色（マ）
ものの色（ケ）
ものの色（フ）
ものの色（コ）
ものの色（エ）
ものの色（テ）
ものの色（ア）
ものの色（サ）
ものの色（キ）
ものの色（ユ）
ものの色（メ）
ものの色（ミ）
ものの色（シ）
ものの色（ヱ）
ものの色（ヒ）
ものの色（モ）
ものの色（セ）
ものの色（ス）
ものの色（ン）
ものの色（と）（蕪村句集）

秋の雨（イ）
秋の雨（ロ）
秋の雨（ハ）
秋の雨（ニ）
秋の雨（ホ）
秋の雨（ヘ）
秋の雨（ト）
秋の雨（チ）
秋の雨（リ）
秋の雨（ヌ）
秋の雨（ル）
秋の雨（ヲ）
秋の雨（ワ）
秋の雨（カ）
秋の雨（ヨ）
秋の雨（タ）
秋の雨（レ）
秋の雨（ソ）
秋の雨（ツ）
秋の雨（ネ）
秋の雨（ナ）
秋の雨（ラ）
秋の雨（ム）
秋の雨（ウ）
秋の雨（ヰ）
秋の雨（ノ）
秋の雨（オ）
秋の雨（ク）
秋の雨（ヤ）
秋の雨（マ）
秋の雨（ケ）
秋の雨（フ）
秋の雨（コ）
秋の雨（エ）
秋の雨（テ）
秋の雨（ア）
秋の雨（サ）
秋の雨（キ）
秋の雨（ユ）
秋の雨（メ）
秋の雨（ミ）
秋の雨（シ）
秋の雨（ヱ）
秋の雨（ヒ）
秋の雨（モ）
秋の雨（セ）
秋の雨（ス）
秋の雨（ン）

人を取る淵はかすこか雲の中（ロ）（新選）
船頭の声下手ぞ秋の雨（蕪村句集 題叢）
船頭の声下手ぞ秋の雨（新選）
船頭の声下手ぞ秋の雨（蕪村句集 題叢）
船頭の声下手ぞ秋の雨（蕪村句集 題叢）
船頭の声下手ぞ秋の雨（蕪村句集 題叢

稲妻や佐渡なつかしき　舟便り　㊀

稲妻のこゝろもしきや　神奈川浦　稲妻の　八丈　みえてきくた柳・

稲つまや浪もてゆふる　稲妻　㊁　鎌倉にて　二首

稲妻やあきつ一ぱの　かくり舟　㊂　秋の浦　伊勢の海

秋の浦　㊃　志摩の国にて

秋雨や秋萱葺いまだ濡らさじ　殿居のいつち急ぎ

秋の空きのふや鶴を放ちたる　白雲路の篠原　一世の榛葉末

秋の霜うちらめなる石の上

櫛さゝ紅葉しおりぬ　恋風はどこを吹たて鹿の角

鹿の声　窓の灯を山一つ見せて鹿の声　（新選）

山寺の月夜野守の霜夜　菜畑の霜夜は早し　鹿の声

秋

獣

渡鳥

残照亭眺望

荻なから山影入日かな・

あら玉寺（唐崎にありし時）

から臼もそれぬ蓼の穂も

蓼の穂や山坊までに角なりぬ

鹿一声一角山を揺るがす

雨中の荻を

雨の荻を雨の荻をに折ふせて　三ぎぬて南をまつ荻の穂・

獣を三つ集て数ふ　せよといふに　折ふしく門を閉ぢ荻の穂

猪の狸森入や　鹿の声　㊀　果ぼる荻や伏猪の枕もと（蕪村）

蕪村

庭なくや宵の雨暁の月㊐　卵の花の夕に乱れ仏の声㊐　（蕪村）

山里や菊も稀なる垣の内

細雨の小鳥こゑ立ちそめて

立ちそめてやがて宮木のこぼれ萩㊐

萩の声㊐

ほり鳥こゑを潮に先寺林

探題二字

紅梅に下りそめたる雨の糸

一刀の下や端山に日を印す

初午や羽織の紐を忘れ売

鳴や舟に魚焼く琵琶湖上（新五子）

動いて宮木

とくまるふかとくる㊐　比叡も森もとかくる）きゝす鶫なく

動いて萩の散るかゆかしき　宇治の里㊐　木深し啄木鳥（　）

秋

動物

（獣、六度鳥淫）

竹渓法師舟後へ下る頃

山雀や梔の赤き実の赤き㊐

鴫立て秋天ひきくなるかな

小百姓鶫を取来を手も

江鮭瀬多降て志賀の夕日やあの魚

釣てうらめたさよ浪の月の

的よし鱸の巨に玉やはく

沙魚つりの小舟漕なる夢おゝ

百舌の鯉切てゆきて鱸かな

蕪村

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

秋木（紅葉ナシ）

朝日ようすきゆうりの木槿ル
修理寮の雨ふく水行木槿ル
桐の葉ふ泊尽すなるを木奚蔭
銀杏踏で一つづつなるを児の下山ル（一句集）
をする子の幸なつかしむ銀杏ル
旅行柳のもとより清水かれ石ところ〴〵
梅もとき折や念珠を掛なから
折〳〵ふ梅すさまじ梅もとき
柿喰の小寺尊し梅もとき

蕪村

出賣のかごとゝもす（蕪村）
虫喰ふ〳〵下向通ひの小桃哉
籠虫の秋ひたすらと啼なり
日ハ斜関屋の檜る晴怜ル
勅旅ちていよ〳〵高き尾上ル（三菱村文集）
宇治行
そめあへぬ尾の油かーさよ赤蜻蛉
かゝか啼く袖なつかしき
火打石の陣や相如か結のきり〴〵時ル
かち川のかーかい系らす
柳ル
草茫を失ふ鵙の高音ル（新五子）
鵙遠く鍬すゝく水のうねりル（新五子）
鵙ル

梅ちとき鳥なきそ　と端居かな
鶯のうたふ来客　梅ちときの句

渋柿やうぐひす紙衣のかくれ蓑　（新五子）
柿を五六升の
椎拾ふ横川の風呂のいとまかな
九盆の椎ふ苔の音閑かな
栗備ふ恵心の作の弥陀佛

幻住庵を晴雲がおもてをとふて

秋

紅葉

高雄

むら紅葉會津商人なつかしき
ひつち田や紅葉ちりかゝる多賀
紅葉見や風意かゝる一本（一分集）の
西行の夜具も生てある紅葉かな
谷水の尽てこがるゝ紅葉かな
ふらて過る藤沢寺の紅葉かな
紅葉してそれも散行　櫻かな　（新五子）
初紅葉松深といふ誰田山　（新五子）
折えたる紅葉枝にも横ひらた　（新五子）の
紅葉して寺あるさまの　椿かな　（新五子）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

紅葉見の岩よ水取筒　外

このもかのもの紅色よき紅葉　外

山暮れて紅葉の朱を奪ふ雨

出家して親在す里の紅葉かな（新五子）

出家して親王ます里の若葉かな

黄な染を山のたくすまるの

岸山やさそひ家あり柿紅葉（五傑）

（る柿若葉（新五子）

秋萩芒

白萩を春わかちとる勢ひかな

薄見つ萩やせ一なかるゝ此おとり

淡老薄やせ一ねばつかな

宮城野の萩更科の蕎麦まいづれ

小松の行よもせりん小萩原

萩ざくれて玉田横野へ分れ行（図）（新五子）

うき旅や萩の雨をふむ（の）

岡の家よ絵引ろ織や萩の花（の）

黄昏や一花よ一鮪の高野寺（新選）（の）

山いくれて野はたそかれの薄かな
垣ねくら蓮一もとますほなる
永西ホトトギス二年
秋ふたつきをますほの薄かな
誹諧発賛
花薄一夜いなづま武蔵坊
太祇十三回忌
線香やますほの芒二三本（蕪村文集）
追風や薄刈取る翁かの
花薄刈のこまことはあらなくに
地下りよくれ行野辺の薄かの

秋菊

蓼花

村百戸菊なき門も見えぬかな
菊つくり汝いくさらい投壷まあらせん菊の花
いてさらい投壷まあらせん菊の花
日てり来伏見のかたの小菊もいろ
手燭して色うつくしや黄菊かな
あさましき柳の落葉よ菊の島
白菊や五山の雪を一の下
山家の菊見るまにうたの句紙硯を
菊に古笠を覆いたる画
菊の露うけて硯の命かな
白菊や庭にあまりて島もて（新選）

白菊やかくめでたき色ありて（新五）
西の京と宿もとめけり菊の時（新五）
二本づゝ菊もよろしく佛壇（新五）
ほきくと二本ゝ折黄菊哉
長櫃み磬ゝたる菊の香ゝ
かしうねや穂蓼の上を塩車
三徑の十歩ゝ尽きて蓼の花
蓼の穂を焚かもとや蓼の花
下露の小蓼ゝ藏す法師哉
黄さくら何の花をも蓼の中

秋

花草

（除萩薄）
（除菊蓼）
（野禾ナシ）

夜の蘭香ゝかくれてや花白
蘭や猫[redacted]のこゝろ
蘭の香ゝや菊より暗き辺りゝ
この蘭ゝや五助が庭ゝ昨日迄ゝ
猪の露折かけて女郎花
里人ゝ里も異なり女郎花
女郎花そも〳〵いかなる草なるらん
ふくと一把ゝ折ぬ女郎花（新選）
萩ゝや一輪深き淵の色
潤水湛蓋蓊ゝや手拭のはしの蓋をかこつ

なつかしき
子狐のかくれ
錦木に吹
雞頭の根
枯梗も見
修行者の往
曼珠沙華
松明きえて
芋の花
？
岸の穂や沖の
（野菊
（新立子）
（新立子）
（新立子）

蕪村

末枯の中に一道ある照葉かな（新五子）

鬼灯や清泉の女の生写――（蕪村句集）

几董と鳴瀧に遊ぶ

草狩んと仰雲か鍋の煮るうち（新五子）（新題林句集）

心にくき草山こゆる旅路哉（蕪村文集）

宇治行

君見よや拾遺の昔の霧五本（蕪村文集）

枝炎仏のくれ杜露ハ現れぬ

萱の捌葉しく軒端をおもひやれ書さく

いとく暗まる（翁草）

萱の葉のうらみ貞なる細雨哉

妹背

秋

稲

蕪村

斗文父八十賀を寿ぎ贈る

稲かけて風もひかさし老の杖

かけ稲と鼠のすたく門田哉（新五子）

かけ稲のうらとみしたり草の露（新五子）

したくかに稲荷の行く法師哉（新五子）

稲刈れて小草に秋のあたる日哉（新五子）

海棠拾ひ日あたるかたへ歩み行

中々と海棠拾ひすや尉と姥

油買て戻す家路の落穂哉（蕪村句集）

新米の坂田ハ早し最上川

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

大高に君しらめせ今年米（新五子）
新米にまだ草の実の白分（新五子）
熊野路や三日の粮の今年米（新五子）

秋野禾（陳稲、蒼麥）

錦木をたてぬ垣根や唐がらし
飴にからき泪や唐がらし
俤にてをあぶる蚤へめ唐がらし
元みてかな杖を見せよ唐がらし（新五子）
御園もる翁か庭や唐がらしの
うつくしや野分の後の唐がらし

人の世を尻をすぼめたる蠏哉
順礼の目鼻書行蠏哉
腹の中へ歯いぬけくらし蠏哉

葉ざくらいとどれ魚や種漬の

甲斐みたまして あたゝかなれ（むし）

ゝんこゝろめやすれ 種漬

綿摘や畑草の花を見て休む

綿とりやだを窓ぬ追かへし（新考）（はは）（新題林句集）

書捨て下葉ゆうべき煙草哉

うれしさの箕なあまりたるぬか三斗（蕪村）

ふる寺に泰山木売をたくまる日哉

水鳥やそれも一羽を落す音哉（新考）

冬ごもり（新考）

冬籠

冬ごもり

冬至

井のもとに一房切を落す音哉

井のもと易水にねむの流れけり

四をふねの嵐の音さびし

鉄おかねをばむ嵐の牙の音さびし（新考）

寺ごとく梅てみこもる冬哉

送春里
下東武

嫁娘立いばり先ず払ふ鳥

大魯の病の
僧来を行る 神無月病ふす知己東山西野に尽して花
故人暁夢余の寒灯を訪ひて物語をいふこともせずなりて
再ゝて哦前の代語を終らず物動のまゝ

牙ともき梁の月の寒哉

借具足我にまぬ寒さ哉（新考）

負傷人訴の一 ありとよ傑句を和して答にかゆをならす

霍英八一而宗にて信濃きこゝろみ
堪ず朝等佛につゝまつりて註経をもまりれも

貧居八詠の一　　（蕪村）

冬ごもり　我も俳の　油哉

冬ごもり　又冬ごもる　藁屋哉

冬ごもり　小の字に曲る　葱畑　（蕪村句集　題叢）

冬ごもり　昨日に過ぶ　冬もまた

冬ごもり　また冬ごもる　雪の内

書記典主故園にはぶ冬もまた

貧之友儒者訪ひ来る冬もまた

蕪村

冬
時候
（寒冷、冬晴、冬至陽）

初冬や　詣んと思ふ　来り（新五子）

宗任に　水仙見せよ　十月（蕪村句集）

百姓に　花瓶貴り　今朝の冬（新五子）

初冬や　京いろ〳〵に　なりにけり

初冬や　神さびわたる　比叡の山

初冬や　七人ならぶ　夕餉の膳

初冬や　香花ともなむ　機多が宿（新五子）

小春風　先帆も　さよ初の冬

初冬や　神さびわたる　比叡の山

冬ごもり　又冬ごもる　藁屋哉

冬ごもり　昨日に過ぶ　冬もまた

冬ごもり　また冬ごもる　雪の内

初冬や　神さびわたる　比叡の山

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

冬

顔見せ

冬芝居

薬喰

蕪村

顔戀鳥見せや夜半の嵐山（蕪村句集）

旅すやまだ見ぬ人の顔を夢に見る（蕪村句集）

鳥見せや前髪殘る東山（蕪村句集）

鳥見せや夜半の嵐山（新五百題）

冬芝居見ぬ世の人の顔を好む（　）

冬芝居火影に女形ときめかれ（　）

冬芝居正に初恋のごとくなり（蕪村句集）

冬芝居戸たゝく音の山ふところ（　）

題背

石公（五百月）

芭蕉去て冬ごもりせよ草の庵（新五子）

面影のかはらけく年の暮（新五子）

電の戸棚もしあるや年の暮（新五子）

いさゝかの人元日もまた翌の事の（　）

年一つもるや雪のかゞみ（　）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　ガラス使用

桃隣の道の細さよ冬菊哉　（甘無村）

冬菊や垣ゆひ直す十歩の間　同

冬菊や山家あまりの住心地　同

葉ざくらのかげや冬菊の杉島て　（新五子）

冬菊のこき宿りせよ一つ家と　同

冬菊や湖水の波のこゝろまで　同

冬菊（空三句抄出）

そこもとの山の茶の木や冬籠　（題葉）

冬ごもり妻もかくやん坊の顔　同

冬籠なに食ふ人ぞ住ける　同

住侘ぬ僧屋ぬり人や冬籠　（題葉）

冬ごもり僧屋ぬり人や茶の花　（新五子）

冬ごもり妻もかくやん坊の顔　（甘無村）

冬ごもり妻の在所の茶の花　同

冬ごもり妻の在所の茶摘哉　（新五子）

冬ごもり妻の在所の茶摘哉・

冬ごもり妻もかくやん坊の顔

冬ごもり妻なに食ふ人ぞ住ける

冬ごもり妻の在所の茶の花

冬ごもり妻の在所の茶摘哉

冬ごもり妻もかくやん坊の顔

冬ごもり妻なに食ふ人ぞ住ける

住侘ぬ僧屋ぬり人や茶の花　（題葉）

冬ごもり僧屋ぬり人や茶摘哉　（題葉）

冬ごもり軒の妻もの干そめて　（新五子）

冬事

（自見七、冬詠、藥玲瓏）

枝ぶりの木木の枝ぶり雪の朝

油灯の人なしにたし十夜かな　（新五子）

炉火焚ふくべ火焚ふくべと十夜かな　（蕪雨集）

炉火焚ふくべ火焚ふくべまの中

炉火焚ふくべ火焚ふくべまのほ

炉火焚ふくべ火焚ふくべまの中をうち払ひ

炉火焚ふくべ火焚ふくべまの中をうち払ひ

炉火焚ふくべ火焚ふくべまの中をうち払ひ

炉開や素町の竹を編ませ（蕪村）

凡董に譲る後園時々なる下ねぎのお業と遊びて

日ぬよ北をそれそやそよ日ねやや五山六六なんとのものきて

日ねや湯気たなびくつきしものかな（蕪村句集）

ねぬ墓下（秋五子）

日ねの隣も餅の湯小（袖草紙）

春雨春に近くして灵屋もうるおい許せ年ぬれ

麦ぬ時の影法師長き夕日かな（蕪村文集）

年も暮れ軒端の梅・

年も暮れ小僧等に法問させて年忘（新五子）

日ねや梢ゆかし（新五子）

冬

蒲團

衾

頭へやかけん硯へや古衾

沙彌律師こそよりくと名乙

古綿を一夜ふけつ蒲團小

虎の尾をふみつ蒲團小

大兵のかり寝あとも蒲團小

いざ寝ん蒲團小

東山の禁を侵し一音法師を追ひ出す

嵐雪と蒲團引あふ侘寝哉

貧居八詠の一

紙衾折目正しく寝ん哉

衾一つ鼠のこぼす会かな（新五子）

蕪村

よき蒲團宗祇とめたようれしさよ（新五子）の
春の行なき小借すみ蒲團一つづ（新五子）の
唐草の牡丹めでたき蒲團かな（新五子）
都人よろめぬ蒲團や峯の寺（新五子）
あたよから蒲團かぶれば海鼠かな（新五子）
鬼王が妻にたくられ一人寝の

冬

火桶
火燵

炭團法師火桶の穴より窺ひり（蕪村句集新選）
炭とりのひさこ火桶に並ひゐる
わかめへき年もあり一を古火桶
裾よ置てゐよ遠き火桶かな
老女の火を吹き居る画よ

小野の山炭匂ふ火桶のあなめかな
火桶炭團を喰事後とくなつゐ
桐火桶無絃の琴の抱心

右ノ句ハ蕪村ノ自画賛ニテ見タリトアル人ノ話ナリ

腰ぬけの妻うつくしき炭火哉

讃州高松より暫く旅宿りせし頃
婦人さだかや其家を立出るとて

こたつ出てはやいんで来る人もむつかしきこたつ哉（新五子）

宿かへてこたつうつくしき在所（新五子）

冬

埋火
炭

埋火や終宵煮る鍋のもの

埋火や春よ消行夜やいくた

埋火やものそこなたぬ岩屋尼の

埋火のありとも見えてめの側（新五子）

炭賣に鏡見せたる女　〃

炭竈に立よる花のあるじ哉（新五子）

炭竈の遣戸一つ木立哉（新五子）

庵買て具うれしさよ炭五俵（新五子）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

蕪村

炭俵ますほの薄見つけたり（新五子）

悼夕雲　自炭の骨ひろひ出すや後夜の鐘（同）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

冬

服飾

飲食

宿老の紙衣の紙子きこ用をこそ〳〵と歩行り（新五子）

眉かな朱陳村の世々や紙衣

老を山へすてし世もあるた紙衣（蕪村句集）

飯粒て洗ふ衣の実盛か紙子かな（蕪村句集）

灰やけばいとゞ小さき夜のかきり（新五子）

寒のある灰やを荷すらきさゝ紙

助なる医師わすれき灰やけの

蕪村

鬼王かあねの杭ぐひ（新選）

あねまわか子 眉月さゆる穴ぼう穴ぼう（蕪村）

貧居八詠の一

雪のあるじ終る冬ごもり

雪の朝 屠蘇酌む春の来を門に

雪旁を左うんとまわれ

炭売の白き息する花の雪

あるじ雪ふりあれは年も暮ぬ

寒梅の老木に咲たる処

埋火や壁に向へば我影の

埋火や壁に向へば我影の

諸州高官に贈る詩巻の中に王夫婦の事を記せしを見て其事を感じて

庵買て易ん小さよ宝舟（蕪村句集）

炉に炭つぐや宝舟慶子が筆のすさび（新五子）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

冬人倫

暮れの秋の錦木や　秋帆(冬)

守行と称する夜を家路かな　秋帆(冬)

終る夜を家路かな　秋帆(冬)

西会いもう里を　秋帆(冬)

夜泣する　秋帆(冬)

冬籠る表太雪に君あり　秋帆(冬)

木のそ一の坊ま　秋帆(冬)

多新のそれ小新語の　秋帆(冬)

時う一事を我　秋帆(冬)

一新のりんで　秋帆(冬)

祝ひて小う　秋帆(冬)

岸辺に枝先　秋帆(冬)

なを春に枝先　秋帆(冬)

(神草紙)
(一新立)

負庭八詠の一

ふのうの出おおく　(無窮句集)

人のよしをあるあ　納豆汁

(真洗ひの生代をしたるき路往)

989

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

冬の時雨 内

天文
生物

古傘の蜑と月夜の時雨かな　（蕪村）

又嘘を月夜よ釜の時雨哉　（新五子）

虹竹に手向侍る。

来迎の雲をはなれて時雨かな　（新五子）

たえ〴〵の雲あのいすよ初時雨の

嘗の竹よ来るめて時雨かな　（新五子）

一くさや風のわたる琴の上

夕時雨墓ひをみ音に愁ふ哉

鷺ぬれて鶴よ日のさす時雨哉

蓑虫の得さうかしこし初時雨

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

蕪村

裏虫のうちと世よふる時雨かな

題朝時雨

雲のいまた夜いあけてある時雨かな

柿の根をあつめてすゝぐ時雨かな

榎時雨して淺間の煙餘所よ立（新五子）

芭蕉忌

時雨音なくて昔を忍ぶかな（新五子）

海棠の花に笑ふやタ〻れの

冬ごもり日くらしくれかゝる

蓮枯て池あをあをき時雨かな

冬時雨（除天文除生物）

しぐるゝや蕪賣人の誠より

初時雨眉よき烏帽子の雫かな

しぐるゝや我も古人の夜を惜む

芭蕉忌を営む二柳庵にて

蕪賣の衣鉢つたへて時雨かな

水際もなくて古江の時雨かな（新五子）

化さうな年かす寺の時雨かな（新五子）

釣人の情のこはさよタ時雨（新五子）

窓の灯の佐田いまた寐ぬ時雨かな（新五子）

朝日のまことかよーき時雨かな（新五子）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

禅寺の廊下たのめ小時雨（新五子）
禅林の廊下ふれ〳〵まし時雨 外 ㋑
目前を昔に見する 時雨の
もの置いて堅田へ帰る時雨かな ㋺
わたり〳〵かくれた人や時雨 外（暮牛）

（其雪影 新五子＝蕪村）

冬

雪 丙

天文
生物
地理

雨の時負〳〵まゝ笠の雪に雪降り（新五子）の
初雪の底を叩けり 竹の月
愚則（マヽ）墓
月と雪松かへたゝき宿 外（新五子）
雪白〳〵加茂の宮人馬てうて
雪のくれ鴨いそがしう戻つてゐるやうな
郡の市に河豚見る雪の朝の
繋馬雪一双のあふみ外田
負屐八詠の一 愚を耐よと窓を暗す雪の竹
初雪や消ゆれいを又草の露

蕪村

陶弘景横山中の村　雪中の牡丹　外

雪折やもの〻夢のさめる時

雪折も聞えて暗き夜なる外の（　）

題七生詩

雪折や雪を湯に焚釜の中

鍋提て淀の小橋を雪の人

初雪や上京の人よかりけり（新五子）

木屋町の旅人訪ん雪の朝の

山里や雪まかしこき犬の音（新五子）

いさり火の焼のこしたん巌の雪（新五子）

一二さかりて行や雪千里（新五子）

蕪村

冬

雪、内

（除天文　除生物　除地理）

漁家寒し一酒に頭の雪を焼（両イ）

埋火や我かくれ家も雪の中

宿かさぬ火影や雪の家つゞき

宿かせと刀投出す吹雪哉

いさ雪見かたうつくしう関のとさ（頃の時（新選））

大雪となりぬ人音茶の煙と笠

烈々と雪に社家の焚火哉（新五子）

金比な飛脚過行深雪哉（新五子）の

住吉の雪にぬかつく遊女哉

焚火して鬼こもらん夜の雪（新五子）

大雪や山家あるいて入たもの
雪の戸に掻を出てゆく木履かな
雪国や粮たのもしき家かちの
雪の戸やそゝりめてたきよの
雪舟のふとめ覚れば二雪信の佐野いつれか富士の雪（イ拾遺）
樂書の塵あたれしけさの雪（イ拾遺）
嵐雪に布團き世るゝ雪の宿（イ拾遺）

冬

風

風や何に世わたる家五軒
風やひたとつよく戻馬
風や鐘にさけ行水の壱
風や山石に小石を吹きあてる
風や畠の小石目に見ゆる
風や畑にちひさき石も見え（新五子）
風や此頃までも萩の風
大魯の兵庫の隠栖を尺萱と共に訪て
人々と海辺を吟行しけるに
風に腮吹るゝや鉤の魚
風やいかなる村のこけら葺（新五よ）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

風や現いて逃る淵の色㋑
風や廣野にどうと吹起るの㋑
風や野川の石をふみわたる㋑
風や何をなげうつの猿おかせ㋑

冬

霜

霜あれて蛍を刈る爺が外
たんぽゝの忘れ花あり路の霜
朝霜や釵を握るつるべ縄
朝霜や室の揚屋の納豆汁

晋子三十三回忌辰

播磨のみをみめぐりや寺の霜
几董と浪花より帰るさ

霜百里舟中に我月を領す
野馬の韁をふみ折る霜の朝㋑
初霜やわつらふ鶴を遠く見る㋑

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

松明ふりて舟橋わたる二夜の霜（イ）
我骨の蒲團みさはる霜夜かな（イ）

冬
寒月
霰
雲

寒月や衆徒の群議の過て後
寒月や枯木の中の竹三竿
寒月や鋸岩のあからさま
郊外靜かなるかしの木原や冬の月
感偶
寒月や門なき寺の天高し
寒月や開山堂の木の間より（新五子）
寒月や門ある寺の男かな（新五子）
寒月に木をわる寺に行逢ふ橋の上（新選）
寒月や僧に行逢ふ橋の上
寒月や門を叩けば皆の音の
石となる椿や　冬の月（イ拾遺）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

玉霰漂母が鍋を乱れ打つ
一しきり矢種のつきる霰かな
玉霰こけるや富士のすそ辺より（新五子）
深草の笠一のきれぬ霰かな（新五子）
初雪の出来そこなふて霰かな（新五子）
岩ほ松霰たばしる小幸原
古池の草伏復沈みて霙かな

冬
地理

てらてらと山をつつみのてる柘榴かな（ ）
むさしひの小くれ人まぶりて柘榴かな（新五子）
なら一條ある寺ぶるしき寺柘榴かな
大とこの雪大くなくて柘榴かな
馬のこもる苔清のうるる柘榴かな
角條として石なるの入柘榴かな
息杜よ石のうるる柘榴かな
昌にもならで悲しき柘榴かな（新五子）
まよ中や小雨の上の柘榴かな

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

冬

貧交八詠の一

歯朶に筆の氷をかむ朝かな（蕪村）

山水の一つ枯れて氷かな（新選）

真に道あらんや枯野水（猿蓑集）

名の詩を題して過る枯野かな（新五子）

三日月も罠のごとくなりて枯野かな（子）

冬川や佛の笠の流れ来る

冬川や孤村の犬の猶を追ふ（拾遺）

冬

千鳥

鴛鴦

打よする浪や千鳥の横ありき

風雲のよすがら月の千鳥かな

加茂人の火を燈（ともし）音や小夜千鳥

磯千鳥足をぬらして遊ひけり

一條もどり橋のもとに柳風呂といふ娼家あり

ある夜太祇と共に此橋の上りて

羽織きて紐も結ばず夜や川千鳥

むら雨に音ゆきちがふ千鳥かな（新五子）

便舟のさくら一つれをき千鳥かな（新五子）

渡し守ふ女の声や小夜千鳥（新五子）

湯あがりの舟先にたつや村千鳥（新五子）

浦千鳥草ゝ木ゝなき雨夜かな（新五子）

里過て古江（つく頭巻子）よ鴛を見付たり

を一鳥や嵐の覗く池古一（新五子）

を一鳥や園守の皆ゝにしき葉（田）（新五子）

を一鳥や花の君ゝは枯て後の

冬

鳥（除千鳥）（除鴛鴦）

水鳥や枯木の中に鴛籠二挺

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり

水鳥や百姓なからう矢取

水鳥や提灯遠き西の京（新選）

水鳥を吹あつめたり山颪（新五子）

凩一陣水鳥白く見ゆるかな（新五子）

水鳥や朝飯早き窓がち（新五子）

水鳥の居所替るかな（新五子）

水鳥や夕日江に入垣のひま（田）

水鳥や巨椋の舟に木綿賣の

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

水鳥や提灯一つ城を出る（新五子）

鴨遠く鉦きこえ来る水のうねりかな

鉦洗ふ水のうねりや鴨一羽（新五子）

佐保川に鴨の毛拾ふ夕かな

貧居八吟の一

閑古鳥人に賢し寒苦鳥（貧イ）

冬ごの河豚

ふく汁の宿あるくくと尋ねかな

秋風の呉人にくらむ目口かな

ふくの面世上の人をにらむ哉

毒うつてふくにたなき世の友とかな

待着てふくと答へて居る町人よ

ふく汁の我活きまを居る寝覚哉

音なせそ叩くも僧よふくと汁

雪のふく鮭魚の止るたゝんとす（新選）

海のなき京なれば哉ふくと汁（新五子）

ふく汁の亭主と見えて上坐哉（新五子）

逢いぬ恋い思ひまゝ夜やふくと汁（新五子）
ふく飯へと乳母いそだてぬ恨み（新五子）
妹がまゐふぐくふ程になりまゐり（新五子）
ふぐ汁の君よ戒名よ甚伯牙
ふぐの賃先生えをふるまふ
玉川の歌口すさむ ふぐ汁友
ふぐ汁や五侯の客の戻り足
ふぐ汁やおのれホの夜い継なる
その昔鎌倉の海やふぐやおき
ふくと汁かな〳〵伽羅をたく夜かな
もち月のそのきさらぎにふぐくい無し

冬

動物（陸鳥 除河豚）

（素堂から鮭や鱈や鰰に斧うつ響あり）
から鮭に腰すゑる市の翁哉（蕪村句集）
から鮭や帯刀殿の雲ごゝろ
詫禅師から鮭に白頭の吟を彫
から鮭やむすめも市の中（新五子）
から鮭の片荷や小野の炭俵（新五子）
から鮭や小野の薄も枯て後の（　）
から鮭や判官との上り太刀の
風呂敷みから鮭と見しは卒都婆引の
寒山の木を伐てから鮭を嘉る

冬

几董判
句合

鯨賣ん市に刀を鼓打ち
つきとめた鯨が眠る峯の月（新五子）
既に浮鯨の逃て月一つ（新五子）（句）
山おろし一二のもりの慨哉（新題林句集）（句）
手取みせんと菜出す鯨冊（句）
思ふことをもさまなる海鼠哉（新五子）
海鼠より鰹うらむる書生哉（句）
杜夫魚の得物ずき翁哉

冬
落葉
茶花

■人と高尾の山ふもとにて一杯の冊
老ぬ哉二たらずやうそたらず（蕪村句集）（蕪村句集）
西吹けば東になびく薄哉
菊に昔に雨降らしたる夜哉
待人の足音聞ゆ夜半の秋
焼栗待て吹田を居る夜哉
古寺の秋あまた哉
随分と松のみ残る寒哉
それもやがて枯木立なるべし
藁屋もる月の光や冬木立
葉物を静に刻む夜寒哉

（落葉降　茶花降）

冬木立

里ふりて江の鷗白し　冬木立

冬木立のやもめを哀れみをもしてや冬木立

郊外二村に質屋一軒　冬木立

夢想冬木立月に僕をわすれなり

郊外出村の人小猿なり　冬木立

笠入れて急ぐや冬木立

ものうるの声して過るや冬の梅

早梅や市室の里の灸屋敷

冬の梅ちりあと石の上

冬梅や出羽の国の中山

冬梅をよれる八朔梅　松乃軒

蕪村

茶の花や白（黄に白）（新選）

茶の花や白にも黄にも黄ばめる（無村）

落葉して漸く遠くなりゆくのまち

屋根ふきの立海鼠を見やり園の上

細道をうつくしやらぬ落葉かな（新五子）

年物を静かに居る落葉かな（新五子）

春日の心落葉かな（新五子）

茶代命を捨よ如也落葉かな（新五子）

長生の会をもよひ落葉かな（新五子）

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　　ガラス使用

（鉄骨とゐふ梅の枝を写す生）

宝ら梅や鉄(マカル)ず　（蕪村）

宝ら梅や鉄ぬ梅の枝の流れ

桃柏の花人もすまあまりあるかな

屋根ふきかふーんな白や归花（新五子）

焚火ーてゐやすぬ庭や归花（新五子）

木一つ飛花の海や　归花の

宝ら梅や梅のそばとうれも

冬草

蕪村

（金福寺ヵ）蕪翁墓

古丘

朴尾花や我も死ーて碑に入らん　朴尾花・

柴刈の鎌をたさるる朴尾花（新五子）

狐火の燃えつくばかり　朴尾花・

お宮ゐの假ゐ引けら朴尾花

我も死ーて碑にはらせん朴尾花・

日あたりの芝ーらーく朴尾花（新五子）（神草氏）

芝朴て狐のゐ通ふ朴尾花

秋去ていくにちにまりぬ朴尾花

水仙や立きおとこかしこ

水仙に狐遊ぶや宵の月（一）

水仙や野の茎花さまざま・

水仙や美人河をくもらー（無村）

咲つゞく見りてあるをつはの花

廣儒者蘆の葉くらく

重出
霜あれて葦を刈取る翁かな

うら町よ菊うる声の月（蕪村）

ひともとの木に枯れ尽す古葉かな

蕪買ふて枯木の中を帰りけり（蕪村句集）

寒菊や日の照村の片ほとり（新五子）

寒菊や日いつを盛の名かたち（新五子）

（江戸）

藤原保吉（天明四年三月没）　二十五

春立つて遅きこの日を春ー

人の世の見もの多き日を永き

春の日の桃みづくうん春の別れ

もゝ肝を空ひか（せばーつゞ心

行く春や思ひ出すべー（蘭雄）

一休や三日なき春ー

春時候　人事

保吉

雪のなくかたい必ず裏方外

うらゝかな見ゆる日ありある程外

春の日を窗にてつゝー（村）詰師外

保吉

万才に高い
立向ふ迄いそめを一たるる
七草の音雛か音と諧なりぬ
雛の宿老の来らの名なるべし
雛の燭漸士かたく火を思ふか
生海苔の見舞に
なりし雨夜か
世の中か折ちるれの春田か
裏の山も代男をまのか
死魚も人も似て似ぬ佛かれ
初午や親の名をつく野鍛治か
初午や花賣並ぶ山の口

春
天文
地理

江よ向いて
空かすむ夕や霞の古鴉鼓
春風や紙切ちらす放下僧
白いーる人よ迄れ舵月
陽炎のもえて利休の雪踏か
陽炎や書自ある草の原
糸遊や思ひもえる日の竹柳
春雨や蛙迄よ夜の硯箱
末のよいかわゆきものよ春の雨

但馬雪白濱
保吉
あら濱の陽炎白く見ゆるなり

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

石原や篠の雪汁 下直る
残る雪車に溜まる春の日
仇事と思ふ間もあり春の雪
淋しさや朧月夜の柏の木
古寺に桜桐の皮むく春の風
春風や富ハとられてあらす松
春雨やなくれて戻る捨木売

香に白へ桧つけたる春の水

春

動物

雉鳴やいまぐ山風の茶の木原
鶯や嵐昌雲りよ鹿も鳴きます
鶯をさまたげくまた聞く小橋かな
鳥の巣に伐り残されし山木かな
追ひ来て刈株かくる雉子かな
軒燕かけてたのむ檜る責
春の雁の聲や朧や夜着重し
駒鳥啼くや釣瓶の切縄ほそる
夕波や雁のねに通る濱南

蝶おめて祇をん心思ふかな
初蝶や松の梢の巣を捨てる
捨蝶の杵に胡蝶のやどりかな

保吉

保吉

雨の蜂佛の額よりいづる
蜂の巣や十つゝ十の親を見る

三時ごろいわつかやうて鳴雖
田螺鳴いて土臭き春の夕かな

何方へ向てや落ん鹿の角
鳴く田螺角なき虫の夜ぶかな

紙垂牲ともちるや春の水
鹿老て馴げに角を落す小屋

鳴田螺萬歳村の門の暮
鹿老て馴げに角を落す小屋

茨垣に身を引く猫の通ひ路
茨垣に身を引く猫の通ひ路

鹿老て馴げに角を落す小屋
鹿老て馴げに角を落す小屋

鳴田螺萬歳村の門の暮
鳴田螺萬歳村の門の暮

三尺の鯉驚かす　散る櫻
花の木や屋敷〳〵の百千鳥
手折りたる桃雨降りぬ落すほど
鳥沈す水の清さよ梨の花
月夜ふく　局口紫つくし咲きたり
日の影や古井を木瓜の咲き入し
古き代の浅の山ひろし　桃の花
梅を出て柳に寺の多き哉
初花に三つ子も物の好みかな
いやしくも見られても又赤椿

春草

里人のあらためて摘む若菜かな
魚籃の片荷を匂へ蓬の萱
帰るさも芹も荷をして結ひし芹の束
春の圃苗代水のうるほひぬ
早蕨の尺みもあるし山家かな
菜の花や多きにしくぞなかりける
菜の花や光りをさまる日の好み
山吹の折たやすきは折らぬ心
雨の色八重山吹の濃過ぎたる
画よりも筆の細さよ菫草

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

歌の人雪夜より藤の宿
望汐みちたり草の若葉ル
雨やらず芥の白し宵の宿
蓬生の宿とはられ三葉芹
追分や葉となくる桐 達
草夢の草にもれなる蚤 外

春草

夏

時候

動物

寝ころび読み捨てある草枕
六月の深度の眼をぬりわくる市の路
暑き日や眼が腕書きつかれ
もち雨や雛の尾ふるふ暑涼し
行く夏のをしく成つたる夕かな
よく見れば芒蘭若む土用かな

音を入れて覚水にふれる

夏

風除の柱を宿にして　牧童

すきやすき刈笛の夜ふかすず

蝙蝠や門の浅黄のわすれ衣

ともしびも蚕くれば蕗の葉たたく

さゝ入るや人を恋ふる蚊の心

蝉鳴いて魚送り行く縄手かな

猶林――啼く真似の誰を鳥

かんこ鳥啼くや四月のたくこ草

鞍おかが門を過ぎけり郭公

茶――さゝ塩壺のそゞく　初櫂

夏

五六月人事

軒の草ぢはあやあやの名をもとよ

軒あやあやこれや一日の忘れ草

湯あぶりやあやをさまる指のすき

ひとりの粽小舟の茶の湯かな

源氏画や武者の幟小袖のもの

今宮をかへ八下りたる〳〵馬

苗曜ふ里やあるる真菰の草

老の名や田植のあとの雨の月

行き戻り早少女ありを尽すれ

蓮見せ――其名誉の御祝ひ

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

夏

三夏雑事

君が代や印地すれてあやめ葺
灌仏やあらたま建し堂の前
行くや鵜茶の
肌みゆる袷の
蚤虱ゐたらちめをさす仏哉

7、斛つけて誰待ちとてや蚊遣火
蚊遣火よむせたのかとおもふ
山里の蚊遣は山の白いかな
鵜の欲の鮎見てゐるきあこがれ
鵜の胸に浪こそ違ふ岩のたゝずまひ
照射を聞くよ違ふ峰の雨
葦の灯よ火串を恵よ桂川
憎まれ蚊よりもの凄みけり蜘の工
水無月をありあけ我よおもはれず
酔狂にて牛の角ふる扇哉

夏

夜に入つて三時ごろを
秣お向を馬方がすゞみ
川狩や雲を引きし岡の家
晝寢覺めて松風の腦の透しけり
炎帝立て風に知らるゝ松の雲

夏

川嶋や青田のへりの真菰草

夏

会葬哭いて人皆急ぐ書寝かれ
橘や枕草紙のたゝり覚え
夏草に高瀬船影ちる夕日かな
麻赤く蛍飛ぶ日に死ぬ島かな
人二病んで十年あるや桐の花
思ひ出の井うつ桐の花
花か何小里にとまる桐の雨
河骨や押れて笑ひたふれ竹

秋

時候

秋立つや長夜の細心
秋立つや先つ暁の駿河町
縄をなふ男事なし秋の暮
家遠き石河渡る文月かな
秋立つ日つゝうひそあたる窗ぶ
いそぐなど秋もよもつる心ぶ

天文

相照す夜の野川や天の川
暮る、迄家の業にて月今夜(八句)
粟稗の影踏む里の月見(一夜題黄)
いさよひや一昨日の空を(臨黄)
秋なくば夜なく月の照ふさん(表八句)

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

秋の野やいくかの露何の露
待宵に書の墨い迷ひなり

門跡の空を見やり後の月
照雨やをみなの秋の思ひあり（八句）
露の玉草刈鎌よ遊ぶ小
秋風のよわきやうなて弾き小（題叢）
古池や杉苔なむ（題叢）起る初嵐（八句）
野分せよ——あ——た木を踏む山路小
稲妻やいまた数行夜の人
初露を團扇よりけし端居小
酔ひあや舟を上れば草の露
海と月ひとおかし——晴くもり
目ざす方人の月見やかの奥

秋
人事
動物

秋風のことでもなくて哭くもの小
燈籠を蛸の雛見る雨夜小
迎火の門をくぐるその光り（親達か（題叢）なつめ（八句））
魂棚や皆ゆかしげに施餓鬼棚
古き程ありがたげなり
格別な引様なきに鳴るかな
花火ちる川上遠きくらかな
人間の垣はさまよふ星の恋（残山めぐる（題叢））
取り付きに鴉山めぐる渡り鳥（八句）
何鳥の涙かくる鵙の聲

花の點紅葉みさをにて落るか

雁を待つ人々立てり寐ぬ夜八
暮の澤物云ひ鴫とありそむ
心細き夜を啼き松虫海の音
黄鳥はとく啼きやみ秋の蝶
柞散る日に初秋を啼く蚊かな
舟の酔さめたよ夜半やまりす
此宿のおいら戸幾童鹿の声
黄昏や一筋よ鮭のぼる
風つよし只一筋の踏む子の心ら
旅の見る子張月や角力取
刈あとの(に)一すぢ雀の声

秋
植物

秋もやゝ(はや(顕著))桐のたまるく人の門(八箇)
何事の商とも(ー)らすや柳散る
柿賣りし價小里の吐ー(か)な
いそのー(ぎ)やこゝろ(百)も椎の下舎り
人の世や花るみま頃の初紅葉
さかぬもて朝顔を抜く男ホ
淋ーさる宿を立ち出て蕎麦の花
風の夕芭蕉葉提げて通りけり
暮もとそさのぶる荻の葉先ホ
秋草にすんくと×るさー矢ホ

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

神さびに杉間の落穂隼屬めり

一日よ一つ取つたる木のまかれ

下紐の風よ山なし——菊の花

芭蕉

秋の露秋の土用よりかゝる月の二日ル

穂芒や田を見る人のほんの夫

菊の香や白粥さむる庵かれ

咲きみちて黄菊静かな昭日ル

いけ栗を人なつかしき笑ひ哉

暮る日尾上の紅葉絡れる

杉陰や湯よ仮たる杉家取

梦みる師走の

夢のまぬるゝ

こゝろ哉

冬

時候

天文

川を中に荒涼

さゝら村立し

松風や除夜の枕を

寒せん

保吉

臨海てらゝ

蔓草の海から

打ち向ひ居れ

牛のつのひそめる

春心す霜月の寒さかな

寒さるゝ見ゆる師走の樂屋ル

百合の根の重なる年もくれ

年の夜や武藏鐘の話せん

やよ雪吹軒の松風おろん

つゐ置いて行くや時雨のぬれ文箱

風巻いて眼にかゝりぬ蓑の雪

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　　ガラス使用

楪やさら〳〵となる
明ぬのや雪吹く見えぬ階戸の山
みそさゝや魚の骨かむめくら（裏新五百題）大
月夜野のもる（ママ）も
ふるふ時多
すさまく霜置く家の素達水
風や約束かるき山人（宗因題）（六句）
小夜時雨書の分別かりくら
初雪や誰がさゝ〳〵らの竹筆
浪かけて柊の霜の清水かな
置く霜のかゝえ行く軒の烟
何もせぬ心推せよ夜の雪
山行と立薄雪おもふ貫
小夜ふ（ママ）ものかひもふるものか

冬
人事
地理
箱忌

さゝのい旅人橇を捨ておりて
僕を炉ふちあたゝめさせる
月や月やいつれか残るたこ一ぱ
薄烟うるや椙の梢の蝉乃売
達磨忌や世に掛ものゝ木履賣
一くるやあの伊賀の人もだ
合歓の木を見てさ師走八日ル（ママ）
ふり行く世をおもふ寒念仏哉
寒念仏杉ふかみねを強き仏哉
世の中を見すてさうな豊の雪
逝礼や仁王の前を肝を注く

寒梅や上戸老いて汗く事忘れ
心高き女の門を鉢叩
其甲を鍋と亀鳥る枯野かな
花あれば皆常盤木よ冬の山
八そのき人を見てをる冬田面（六百）
暁の氷柱雨のしかりかな
初雪や寄て氷の形かりそめ
炭焼のあのかゝみまでふりつもる
掛乞の白き眼や宿の梅
歩のそね人の心のおばつかな
白雪や着なれし袴ぬぎ捨つ
雪の山

冬

生物

世の中に余義をわうてふ鶴のめくみ
夜を書をわうてふ鳥の深雪かな
寒きにて知りぬ神も鳧の中
小夜千鳥帰りくや局の風見無
鷹帰いて柏葉光る深山かな
人〻を去りかねて鷲のぬくめ鳥
力なやむき二里ねたる雪の嶋
千鮭も皆賀の心かな
魴皆孔果てつゝんよ鳥帰く
茶の花をまきれて暮生て頃分
山茶花に麩斗干す僧の日和かな

里人のとかくはらく落葉かな
出羽ざかあるのが冬の梅
水仙や江湖七〻まる山の寺
梅やくみそ石路さく窓の夕水（冬）
葱汁夜中いかなる（題共表）
行く人のあと推すの一つ
から鮭や町の凡の立落葉
佛人や思ひありけん海嵐かく
水鳥や人に住居のさつし
さ一昌之妻なき苦るありそう
草枯やくの世に見る夜の雪

大鳴蕨 夢太（天明七年九月七日没）七十

春

新しき冊つくる春の灯

書ふるす犬や米穀の花の奥

古草のところくる董哉

春雨を接ぬ目水のゆくふ

慕太

洛陽の朝餉過ぎたり春霞

行旅

馬僧てかくるく〳〵や霞みゆく

菜の花のどこまで大和河内かな

落ちくるや雪を霞みのあなたお大井川（芭蕉）

鹿もよく寝て暁の雲奈良の月

春の月櫻一枝松のけり

春風や一度は起きる雪の朝

切れ凧や主なき須磨の春の夜明

大磯

祐成が憎みあまりや春の夜

南浦

あたゝかや水かふるく〳〵三三味線の音

品海

江戸向ぬ帆はなかりけり春の風

秋

時候

人事

天文

遊行寺

上人いつ三味の田守の秋の暮

顕良

鑿取て石と語るや秋の声

勘當の母を逢ふ夜や盆の月

星逢や川越いとり参らせん

庵崎

里人の恋する笛か盆の月

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20　ガラス使用

遠里や擣人見えて小夜砧
黄菊白菊鮭紅葉の節句哉
新蕎麦や朝は余参る傳九郎
名月や汐満ちくれいさく化鰹
白露の果あり蜘の糸
秋風や人のかけたる六里川
秋風や片羽煩ふ胡蝶哉
望汐のうしろ歩みや月の鶴
砕けては三千尺や瀧の月
新月や青橘の影ろし
僧ハ叩く、百屋の門や
金屏や雨吹入る
野分

岩端の就馬次なつ野々分
稲雀て里静こ名の月

日光霧降瀧
鶴岡社頭

秋
地理
生物

川海老や叡も遊ぐ秋の水
九重を中に野山の錦哉
栗の穂にくるかぬ時か鳴く鶉
鹿の音の嵯峨へ下りたる夜寒哉
松山や青き中ゆり鹿の声
秋の蚊の血をふくれたる哀也
刈跡の薄にすがる蚤哉
田家
叡こふ猫も肥たり里の秋
もの荒れて冬瓜かくる蜻蛉哉
けふ見れハやもめなすりの秋の蝶

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

冬瓜の膓たつかきりくす
動く葉のひなたさへて晴嶺外
二羽くとかそへて悲一つ
水とりて妹が系机ハ荒みけり
朝顔の土みそふ迄荒みけり
暁の日和になりぬ萩の声

神奈川 出帆招く旅人も立り花芒
（前書アリ）
六尺の稲なかりけり年代記
我ものに手折ば淋し女郎花
蛙捨よりほひ立り女郎花
家毎みな祖父ある菊の山路哉
楊立日光廟へて淋しタ紅葉

木曽路

井華集序
蕎麦と佛語は田舎そだち
思ひ都ぶりの柴園の昔日
我難波のうわ人も日頃ハ
あハ雀羽の雑談高情をも
過ぐして昔をはなれ行
記録数言もかくや紙屋
かみの部人民和歌の風雅に
集油をもりみちのくの

井華集序

蕎麥と俳諧は田舎そよきとや老うふやうに世を思ハ都ハなほ桃園の昔日なる人もこゝにたはからめ我難波のうら人も口細たもの乏しきをまねふまハ蕉翁の雅致高情をもくみ人妻のよゝたゝりまで見過ハ公事を恨ことく倚某か十論古今抄俳家の説難數方言もれ〳〵紙墨を費えたりないてやその

かみの都人は和歌の風姿に椋のたをその弟子ありまれ

巣油をあらみのふる里村の月次にもて

もてあそびよくこゝろしけふハ貞室重頼らの雁伝推て更

る夜を惜みつゝ今や和歌連歌の道場おのがとちく
立わかれてかりみも隣に栖遅なあるじ於是みやこの
俳諧もひとつの道と成んくより何かーと我が社統
をとはるゝ人もおのがくは蕉門の風韻をうつしまねふ
ま炉辺のかけこ硯乃信濃伊吹の挽おろし又なつかし
まもでひわさもなりんてふ夫も是もみやこのあなか
たたるへきうは我友几董ハ御溝水の流ふ湯を引
きてみそらの池の苔の角髪まりの俳句の長短口に絶る日
なよ好古なりけり志かあ其雅致を師によなし洒落ハ
父に傳よのみならすかねてハ晋子か風韻を宗とせりむへ

なるゝ師ハ無村父は几圭此二老の師なる巴人はむ
うの晋子か徒弟にーあれハ墨縄の節たゝすをも
ある時人この頃都に遊ひて夜半亭をとむらふ何
らかの物かたりのついて一部の冊子をとり出てふ曳
我二十年来の句帳なり社友らこれを江湖に梓せよと
もとむを我ものてはさすき幸に事きるあせると時
人云兄あるすや世を見れた詩文の自撰日を逐て戸と
につ和歌にハ市賈の撰集あり俳士のみ壁に蔵もへ
きたあるさるはこれをはゝあるこゝろもあれあ此
ての磯川瀬の古杭うたていたとのとり言ふこの

夜の旅寐に筆をとり侍る此篇や師か雅致又
ハ師祖連の風韻をも備へて巻をとゝ市は彩色ま
ゆきをうちのこしかゝるなどのたゝの会ハ都に及ふ
へうものをちやほん讀て知る人ハ考むものそかくふ
ゝ長柄の濱松陰ちるのなどの人無隣居士といふもの
りこゝまで

井華集自叙

明和庚寅のとし冬かりそめあ
の数册みなあかり多此須秋の夜のつれ〳〵なるま
とこゝろ〳〵にかゝりて庭の木草のいや茂
りみちこゝろ〳〵古井の水のあふれ溢るか如くいとわつら
ふことはり多うれいかゝて筆とりてかゝたる
墨あり打消〳〵ぬ〳〵ふみちを其たより一人ありてこの
なむさんやその中ハ筆こゝろひとの聞知たるもあるも
又みつから頭にふれおよて楽〳〵こゝしたるもあるこ〳〵
いうまをはゝり無下の事ハなり給ふやと泣なゝり制し

とめうるにそ亦た志なるかな　是を
二巻となりに書約して　昔のも今のも鈍きさろし
きに抱うす次き濃きし打まじ（ほきくく撰しあ
あつ扨此双紙に名をかうふらせよといてなかの人とみる井
華集と号くいうある故やら我知らすそうさるる
何となく心にかなひたれば漫に表題とな　冒あ于時
天明七年丁未稲長月のそ一あ洛東聖護院の杜
陰なる春秋庵にて
　几董誌善書

井華集跋

昔の五元集は其角先生自撰ひみつから浄写して
底にありしを傳て人の秘蔵し伝しさるを筆硯を
延享の比有夏なる人之得て梓行し世にあるか
もの　とそ夫よりかみつかる後人の意ふ所に
集まこるるうすといふとも多くは今の人も家くの
よて晋子自撰の如き花実配當変化自在なるは彼
五元集も権輿と謂つへし師や春夜といひ弱
冠の詠より蕉門の深きを探り晋子の人となりを
暮て筆意を摸し凡詩を善なのこころさし大ろし

かは彼立元集に俗し名の集を筆記せり人たまゝ
乞て閑せんことを望めい師亦いまゝ稿を脱せす月浮の
期を待へしと余其春秋を待るの日あらんことを歎
おきりに勧て先初冬を木に名つせ三冬の史建
ゑ託すことしかりぬ
寛政元年己酉春　門人　下村氏春枝識
（平村氏杜栗書）

高几董（寛政元年十月廿三日没）（四十餘歳歟東）

春時候（暫暮）

正月や烏帽子かけたる木工頭　ナシ
正月や屏いたまゝき采女達
元日の酔伏ひ来る二月哉
如月や一日誕す海の風
春寒く二つ残りし雞卵酒（井華）

よき衣に春の寒さを着のびず
ある岩にとまりて氷に落ー椿の氷る余寒哉
奉納い世太神宮　有がたさ餘りて寒し神の場
春の夜や柚を踏つぶす小板敷

几董

春の夜や數ふらべる誰の家　士朗（明鳥）

春の夜や連歌滿たる九條殿

春眠不覺曉　春の泊鯛呼ぶ声や濱のかた

門口に風呂たく春の泊りかな

關札やとなたのとおり春夕（牛邊）

僕か妻の紬着て歸る春の夕

奉納五律篇　今着キし沢庵漬て春ゆふべ

おもしろき名の有かつたかの春

題一らす　蹇の顏ぼうふら春日ル

餅食ふ詩人鈍しや神の春（新雁栗）

對酌

遲き日やこと〳〵かけし草履道

遲き日や清ルハ昇る酢あへもの

長日や宿替の荷の殘ス

長日を羽織着るう寐たりけり

影遲—魚餌について日三竿

園の戸に鎖おろす春の名殘ル

春暮ぬ醉中の詩に墨ぬらん

行く春や伊勢のたよりもあまたびと

雨そぼつ春の名殘や茶一椀　士

蓬莱に聞かだやとふ翁の歲旦なり

對友人行燈をとぼす春を惜みけり

大名の一夜嶋原〻の春

暮んとす春の狂いや雹ふる

草臥て寐し間に春も暮みなり

還俗のあり戸痒〳〵や暮の春

行春や　狸もすなる夜の宴

めつら〳〵と見るものも毎に春や行

むこたり〳〵返事かな日や彌生尽

花に醉鳥たふれあるは青楼の宿酒に三春の曉を覺えさるも又風流洒落のためにつのそる奴なるべし

死なでやまめいくつものよ暮の春

春

正月人事

三月人事

子日

粥杖や梨壺の五人打ちそろし

手を添て引かせやるうす小杉哉

宮引の宵は過つゝあはね恋

さあたらんほと念佛したまへと法然上人の答ふいとたふとをかゝり

氣にむかぬ人念佛申せよ御忌の場

著たふれの京を見る出よ御忌詣

やゝ入の脛あらはるゝ野風哉

やふ入や命の恩の医師の門

やふ入やついたち安き中二日

やふ入の我に遅〳〵や親の忌

雪信う屏風見そつ雛祭
うら店やたんすの上の雛祭
雛酒や汐干を語る國家老
雛の日や習ひ荘に立つ客もあり
桃の日や雛無き家の冷しき

墨ぬりて浦よく落つる日に凍
一安良居祭やすらめや鬼も蕨れる若草野
十九日と廿日との晴間
主にわきかくしたる
たゝ〳〵嘆の扇ぬく空や御身拭

春人事
（陰月三月人事）

二日条　花見る命大事なり
傾城に詔弱之たす彼岸ぶ
一休ハ何とおよるそ涅槃の日
南都にて

熊阪に春の夜ちむ薪かな
凧の尾の我家たなる蛙さよ
海士の子や冊の中より几巾
脇のそれのとかに啼鳥

西行忌
骨をもて作れハ和歌の声美し
野を焼や小町か髑髏不言

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20
ガラス使用

摘草や印籠提―尼の公
畑をうね翁の頭巾をみそ
そこ―きいつすか接木覚束な
出代のあと濁さ―やぬか袋
出かはりし身のかくつまわ草枕
表具師が無沙汰叱りつ炉の名残
炉ふさいで碁とふ病うつりけり

春事

春
朧月
霞
陽炎

薄と春雲籠皓月
おぼろ夜の南下りに東山
戯男に道踏かへんおぼろ月
細代木のゆるく夜頃や朧月
三盃の酒にうたて風雲の癖
志賀の山越朧月
志賀せまし―
塩山亭遠―朧月
落ちぬへき西山遠―
朝霞立つや夜舟の枕上七

旅意
三條をゆりみもて行く霞かな
巨燵出てまたたゞ用のさめぬ霞ヶ
晋子七十年懐古
夕霞思へば隔つ昔かな
遊糸白日静
ゆふまいと静うなり杉の風
陽炎や酒みめぐれたる舞扇
おさご路和陽を追波かな
陽炎や泥脚乾くわらい堀

春

天文
（除朧月霞陽炎）

市陌
繪草紙に鎮まりく店や春の風
春風のこそつかせ〳〵り炭俵
途ゆあふて手紙披ケバ春の風
少年行
春雨や簑の下なる恋衣
春雨に似気なき雷の響哉
春雨や造化へもとす芸の庭
春雨や鼻うちくぼむ壬生の面
春雨や造化三度や春の雨

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』 請求記号 WB12-20　ガラス使用

春之文

歲貢の来ぬるを恨むや春の雨

野行

拔捨—野葱古りたる春日哉

芭蕉庵の杉宗和尚に消そこねすらし春の雪

椎の葉に盛こぼすらし春の雪

初茸に心つよさる春の霜

花過て吉野出る日や忘霜

春地理

春日晩望

日ハ落て埋るゝとそ見ゆる春の水

さす棹の拳にのるや春の水

五器皿を洗ふ我世や春の水

磯山や小松の中を春の水

野ル山ル冬のまゝしやに春の水

雪に折し竹の下行春の水

川風寒みち鳥なくなりといへん人をして炎暑にも寒からしむと
かわある蛙飛こむと水音を聞したる言外の余情そなるべし
此句境ハ及ふへくもあらねど

夕さゝれた千鳥飛ふたり春の水

遺に光琳あり俳諧に鬼貫あり

行水や春のうらゝの置所

国立国会図書館　タイトル『俳家全集』　請求記号 WB12-20
ガラス使用

海邊の曙と題に

紫に夜は明かくる　春の海

春鶯

鶯鳥の卵時雨に高音かな

鶯の隣へ逃て　初音かな

鶯や伊勢路を出る暦売

感偶

羽洗ふ鶯も見る紙屋河

鶯の啼にかくるや　枯うら

市中

鶯の二度来る日あり来ぬ日かな

鶯の立つ羽音して高音外

初音―て鶯下りぬ日のもと

春鶯

金衣公子
鶯や小太刀佩たる身のいかり
鶯や日の出の後の霜ともり
　苔根にて
鶯に杉明そらむ山路かな
新鶯
鶯の訛かなゆき　若音かな
　梅花見にと来つれとくるくるにて
鶯よ何かこたふる迚したく
鶯の影形見えて初音かな

春鳥（除鶯）

田家
乙鳥や雪に撓みし梁の上
乙鳥や流れ残りし家二軒
もゝ葵牛の胯くゞりけり
市廓
乙鳥や夜の酢壺の驚かす
乙鳥や夜の燕つるむ門もろ（井華）
村深うして燕
　淫鳥羽のつくろひて
乙鳥や輸の小魚つゝみ行く
雁かねも春の夕暮となりぬらん

風呂の戸をあけて雁見る名残哉

宮中野遊吟

江東小屋敷女中衆遠雉子

雉鳴や暮を限の舟わたし

虹の根に雉鳴くや雨の晴間小

句会に

三井寺の鐘そこそこに雉の声

鷹峯が画に

春のあらし雉打音も霞みそめ

山陰の夜明をのぼる雲雀哉

起臥や身を雲水の友雲雀

僧になる児みるもかなしや雀の子

春動物（除鳥）

貴家の伊勢かるた軒端や猫の恋

琴の緒に忌繋ぐもつるれ猫

藤棚や童き身を捨す庭

鮎汲や喜撰が嶽も雲がくし

干鱈やくゝしの柴や燃んとす

佐久良太に之辞

かの大臣の都に潮を汲せたまひし風流みやび氣なくなんと朝の塩竈焼とふ物を製しそのくゝ

膳を下し盃を洗ひ街しの興た来つゝうそ

醉中の吟を調ふ其吟云〻出奏句後にあり）

腸を牡丹とや

蛤の煮汁せ櫻鯛

うるや春小袖

待日のハ来であなかまの蜆賣
たつのと客に隠すの田螺あへ
鳴東の縣き桐油嗅き駕に蛙を聞夜の孔
飛くに竹の葉伸や鳴蛙
啼蛙神もたしーめて鳴ん夜ル
三日月の影踏濁す蛙かな
蛙鳴く井に麥洗ふ月夜ル
村落 さゝ[illegible]ろや蝶も巻込 俄雨
舟につむ植木に蝶の別れ
草の戸や藥を掌に蝶の留主
蜂の巣に麦源八の宮居かな

尋蝶夢不遇

春

梅ト

天文気物地理

幽径ヲ

狂雲妬佳月
梅の香に狂ふの如ク一月の雲
埒もなき荊ら中の野梅ル
梅散るや京の酒屋の二升樽
山人に花咲ぬやと尋れて
咲散もいざしらず梅の伏見人
をちこちや梅の木の間ハ伏見人

遠望

老ら梅に餘寒の雲のかゝるゝ
老ら梅にこたえその氷雨の降日ル